

ました。きれいになったのは学校だけではなくて、子供達の服装や礼儀、住民の意識も変わってきました。このメイトウ学校では 1993 年に高校進学率が 0%でしたが、13 年の協力の中で高校や専門学校に進学する生徒が 85%と飛躍的に伸びました。また本年、大学進学者を 10 人輩出しましたが、この 10 人のうち 7 人が教育学部で、将来自分の村に帰って教師になる夢を持っています。この子供達が教師となって村に戻って行けば、また教育は大きく変わっていくことと思います。

きめ細かい支援



タイ国チェンマイ県サムーン郡
メートー村学校
現在 4 民族 400 人の生徒が通っている。
カレン族、モン族、リス族、ラフ族

新しくきれいな学校：

- * 衛生状態が格段に良くなる。
- * 安心して学校にこられる。
- * 勉学意欲が増す。
- * 生徒、先生のやる気が出る。
- * 地域の教育に対する意識が変わる。

私達は TPAK のタイでのプロジェクトはそろそろゴールに達したと考えています。しかし、私達の仕事はまだ終わったわけではないのです。タイの西隣の国ミャンマーでは、軍事政権という政治形態もあり、教育費が予算に回らず、教育が大変遅れています。この国では政府がインフラを整備するということがほとんどありません。村人達は作物を供託して、すべての家庭が協力して道路を作り、水を引き、学校を建てていきます。その支え合って生きていく姿に私達は多くのものを学ぶことができます。ミャンマーシャン州に住む少数民族パオ族の居住区で、2001 年から学校支援が始まりました。

ミャンマー国(ビルマ)

◆ 東部・・・シャン州



シャン州ナウンニヤ村 2003年撮影



タナカを造った子ども達



少数民族パオ族

村人は学校建設委員会を作り、建設を業者に任せるのではなくて、自分達の手で行います。TPAK は建設費の半額に当たる資財費の支援を行います。村の大人達は子供達の学校建設のために作物のニンニクやトウモロコシを供託して、何年も何年もかかって資金を作って

いきます。おじいちゃんやおばあちゃんまですべての村人が建設労働に参加して学校を作り上げます。子供達のために村中の大人が一生懸命がんばります。でき上がった学校は子供達への愛でいっぱいです。



これは、つい3週間前の写真です。子供達の中に私が座っていますが、ヤンゴン市街地の孤児院です。子供達の状況は私が1991年に衝撃と怒りを覚えた、タイアユタヤのワットサーキャオ孤児院より更にひどいものです。今後、この子供達の衛生状態、生活、教育を改善していくことが私達にできるのか、どんなプロジェクトが的確なのか、今振り出しにもう一度戻ったような気持ちです。



この孤児院では270人の子供達がコンクリート打ちっ放しの床の上で生活しています。机も椅子もベッドも布団も何もありません。見渡しただけで皮膚病・眼病が著しく多く、先生が静かにしなさいと声をかけると、そここから咳が聞こえます。ここには医療の手がまったく届いていません。ここにいらっしゃる方で、ボランティアでここに見に行ってみたいという方はいらっしゃらないでしょうか。



そして、インド・ヒマラヤの麓の山岳民族の地域のプロジェクトです。山岳民族・少数民族はどの国においても貧困や差別と戦っています。このインド山岳民族の地域のプロジェクトは教育支援以前の問題です。就学年齢に達する前に下痢で死んでしまう子供達が多すぎます。衛生意識の欠如からくる感染症が主な原因です。この地域では、WFP（国連世界食糧計画）、日本の JICA と組んで衛生教育キャンペーンを本年4月から始めています。40校の学校で手を洗おう、トイレを使おう、爪を切ろうなど、いろいろな衛生に関する活動を歌や踊りや人形劇を使った楽しいキャンペーンで行います。



この子供達が大人になった時に自分の子供を感染症から守ることができるように、長いスパンの支援になります。子供達の明るい未来を開くのは私達大人の役目ではないでしょうか。世界の子供達が健康で幸せな未来を持てるように、あなたの力が必要です。地球市民の会かながわ、TPAKの発表でした。どうもありがとうございます。



司会 岡崎 勲

ありがとうございます。そうすると、タイのアユタヤ、ミャンマーのシャン州やインドのウタランチャとか、かなり各地で活動しておられますね。何ヶ所で活動しておられるのですか。300人でやってらっしゃるわけですか。

近田真知子

学校数は大体、現在 300 校。

司会 岡崎 勲

300 校に対して、いつもそこに誰かが行って、1年に渡ってやっているのですか。

近田真知子

はい、ずっと駐在しているわけではないんですが、有給のスタッフは 2 人しかいないのですね。その他にボランティアスタッフが大量いるのですけれども、年間を通じてもうしよっちゅう訪ね歩いています。

司会 岡崎 勲

年間の予算はどのくらいですか。

近田真知子

年間の予算は大体 2,000 万弱です。

司会 岡崎 勲

2,000 万弱でやってらっしゃるのですね。ありがとうございました。
それでは続いて、NGO Bridge Asia Japan 理事長根本悦子様をご紹介します。根本

先生は、大学卒業後、民間会社を経て（社）科学技術と経済の会で企画編集に従事され、その後フリー編集者として「まともな食べ物ガイド」、「ふれあいの医療ガイド」などで、市民活動の紹介とその社会的認知に向け活動されておられます。市民活動を作る会などに参加され、現在 NGO Bridge Asia Japan 理事長でいらっしゃいます。NGO Bridge Asia Japan は規模の大きい NGO で、橋を架けるだけでなく、上水の供給、職業訓練などでも活動され、国連からもサポートを受けておられるとのこと。根本先生よろしくご発表をお願いいたします。

根本 悦子 (NGO Bridge Asia Japan 理事長)

Bridge Asia Japan の根本と申します。よろしくお願ひします。まず私ども 1993 年に NGO として、任意団体として始まりまして、ベトナムはそれ以前から個人的に支援しておりました。それからミャンマーは 1994 年から、これは UNHR の要請がありまして始めました。そしてスリランカが 2002 年に停戦合意がありましたので、2003 年から始めました。まず非常に何ていうか、活動が多岐に亘ってますので、ちょっと早口かもしれませんが、大体概要ということでお話しさせていただきます。

まずベトナムなのですけれども、ホーチミンとフエと 2 か所でやっておりまして、ホーチミンの方はここにあるように障害者のマッサージ修業支援とか、あとホーチミンの、皆さんが多分行かれるところですね、第 1 区のベトナムのすごい賑やかなところのホテルに泊まれるのじゃないかと思うんですけども。

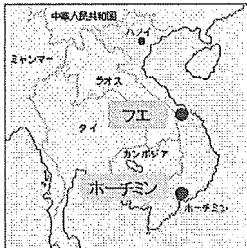
ベトナム (1993年～)

ホーチミン

視覚障害者マッサージ就業支援事業
障害児生活訓練・就業支援事業
低所得者地域社会改善事業
(ゴミ分別、環境教育、教育支援、マイクロクレジット)

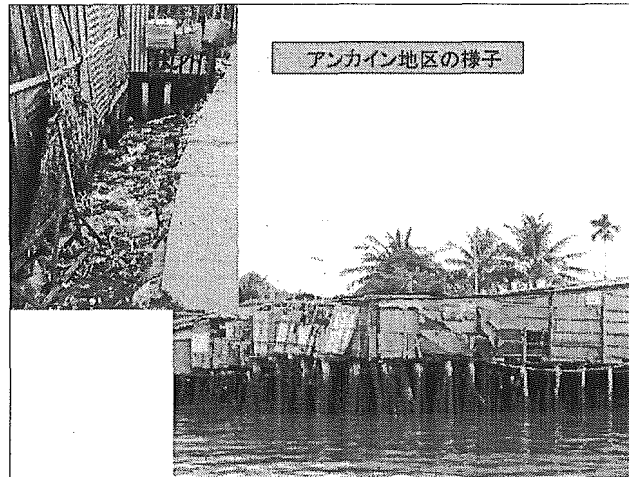
フエ

低所得者地域社会改善事業
(識字、ゴミ分別、マイクロクレジット、教育支援、環境教育…)



A map of Vietnam with labels for Hanoi, Haiphong, Ho Chi Minh, Hue, and Hanoi. The map shows the location of activities in Ho Chi Minh and Hue.

そのサイゴン川があって、サイゴン川の向こう河岸っていうか、向こうの方ですね、実は橋がない。橋がない川っていうのがありましたけれども、向こう側がこのように、都市部の周辺に田舎の方から上京して来て勝手に住み着いた人達が、いっぱいスラム化しているわけです。



ここはアンカインという第2区ですけれども、ここで環境教育とか生活改善運動みたいなことをやっています。あと、視覚障害者の人が今多いんですが、知的障害者の人を対象にして、まず視覚障害の人にはマッサージセミナーというのを、これはアンカインという日本に視覚障害者の当事者の団体があるのですけれども、その人達の力をお借りして、5年間のプロジェクトで毎年日本から視覚障害の盲のマッサージの専門家を、ベトナムへ行っていただいて3か所ぐらいで、このように視覚障害者の人を集めてセミナーを行ってきました。世界的に見て、視覚障害の人が鍼灸・針・マッサージなどを医学的にこう何ていうか、社会的なお仕事として認められている国っていうのは日本だけです。ベトナムでもですね、一通り皆さん器用ですから、マッサージをマスターされるのですけれども、それでもまだ制度的に障害者の方にこういう門戸が開かれていないということで、今後はベトナムの制度の問題というふうな形になってきています。他に知的障害者の人達が、多くの場合は自宅に閉じ込められているような状況があるんですが、そういう方達を引っ張り出して来て、街で生活できるような形の支援をしたりしています。



これは先ほどのアンカインの低所得者の人達の環境改善活動なんですけど、皆さんよくゴミを川にポイポイ捨ててしまうんですね。ベトナムも非常に今、GNPが7%という急成長を示しておりまして、皆さん、このように買物をすると必ずビニール袋にいろいろなもの

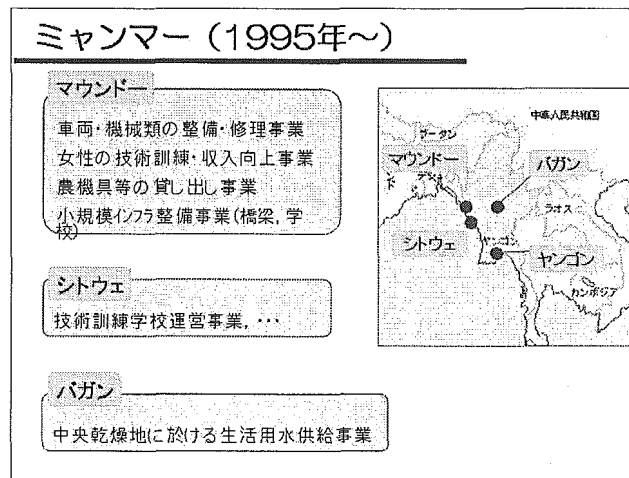
を入れて持って帰って来るのですが、実はベトナムにもゴミを、日本もそうでしたけれども、もともとゴミを使えるものを買って、分別してそれをまたリサイクルしているという人達が多かったわけですが、そのインフォーマルセクターというんですけども、そういう人達がなかなかこう、ベトナム政府が認めたがらないというんでしょうか、ODAで大きなゴミ処理施設は作るんですけども、こうした住民達への分別教育とかそういうのはまだまだという感じがしました。私達が低所得者の地域でこういうことを始めています。この低所得者の人達の地域というのは、実はベトナム政府もあんまり認めたくないですから、そこに水道だとか、電気はもちろん来ていますが、水道とかトイレの施設とか、なかなか法的な、あとゴミ収集とか来ていないのです。そこで、そういうことを支援してきました。また子供達もなかなか就学できないということがあるので、そういうものの支援をしています。



こちらはもう 1 つのフエですけども、フエは古い、まあ日本の京都と似たような、古い都がある街ですけども、街の方に入って行きますとですね、これもやはりフォン川という大きな川が流れていまして、その上に水上生活をする人達がまだおります。そういう人達が、まあ水上生活をしている人は伝統的にいたのですけども、洪水などで船を流されてしまって、ここは有名な王宮があるんですけども、王宮の壁沿いのところに自分達でやはり小屋を作って住んでしまっているような人達がいます。ここでも実は私達、日本のスキームですけど、外務省のスキームで日本 NGO 支援無償資金協力というので、今年からこの低所得者の人達を対象に、今、学校に行けない子供達のクラスとか、あとゴミ収集ですね、自分達で分別してゴミ収集して、それを売ることによって自分達の地域の道路を作ったり、トイレを作ったりとか、ゴミは捨てちゃうと駄目だよ、集めて売れば収入にもなるのだよというふうなことを環境教育ということでやっています。



今度はミャンマーなのですけれども、ミャンマーは 1995 年というふうに書いてありますけれども、このマウンドという、ミャンマーは 5 つの国と接しているんですけれども、マウンドって左の上の方にありますけれども、あそこは実はバングラデシュとの国境地帯で、今から 150~200 年前にバングラのその何ていうか人口圧力みたいなもので、ミャンマー側に川 1 本渡って住み着いちゃったモスリムの人達がいるわけですが、これもまたミャンマー政府は認めたくなくて、この人達のインフラ整備っていうのはほとんど何にもなされていないような状況なんですね。今から 12~13 年前に活動を開始しましたが、今のミャンマーには、あの国境地帯っていうのは自由に外国人が入れません。今から 12~13 年前にモスリムの人達が、何があったのかよく分からないのですけれども、バングラの方に難民として 26 万人出ました。そこで UNHR が入りまして、そのバングラデシュからの帰還難民の人達を受け入れて、ミャンマー側で再び流出しないようにということで、職業訓練とかいろいろな、ここで安心してモスリムの人達が暮らせるというような地域開発をやってまして、そのインプリメントパートナー、事業実施団体として私達が、UNHR から要請されて 95 年に入りました。ここに書いてありますように職業訓練とか、女の人達、その帰還難民のモスリムの女性などを対象にお裁縫訓練とかをやっています。



それから一番大きいのはこの地域で UNHR を一番リーダーの機関として、いろいろな各国の、フランス、カナダ、いろいろな国からの NGO がここに入って来てまして、この地

域の再定住ということで取り組んでいるわけですが、一番ここはもうヤンゴンの役人も 1 年単位で単身赴任するという大変な地域で、年間雨量が 6,000 ミリで、マラリアの多発地帯で、それが雨期に集中するという大変なところ。それで何ていうかその活動が、車が動かないとどこの NGO も活動できないので、大きなここにワークショップを作りまして、各団体の車の修理などをここでやっています。そして、その修理の技術の移転などもここでやっています。それからこれ、スカーフ被っているのはモスリムの女性の人達ですけれども、この人達を対象にお裁縫訓練などをやっております。

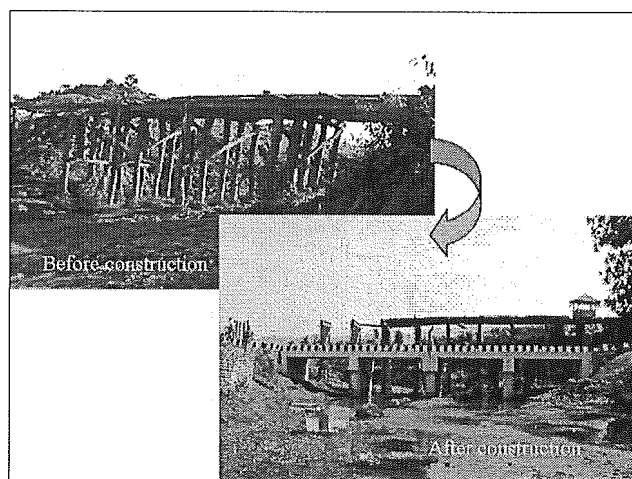


それからあとですね、先ほど岡崎先生から紹介ありました橋梁建設、私達の名前、Bridge Asia Japan なんですけど、別に橋架けようと思って付けたわけじゃなかったんですけども、学校とか建てていまして、学校建てるために車が入れないわけですね。



どういうことかっていうと、これがこんなような木の橋なんです。ここは 6,000 ミリで毎年サイクロンが襲うというような地域ですから、この木造の橋もすぐそのサイクロンで流されてしまうわけです。それで、私達がやる時に OJT っていう、必ずその村の人達から技術を移転しようということで、研修生として出てもらって、座学もやって実地訓練で皆と一緒に橋を架けていくというふうなことをやってるんですけども、それで一番最初に、どうしても学校建てるのに資財を運び込むために橋がないと駄目だということで、研修ということで橋を 1 本、コンクリートのそれこそ 6m ぐらいの橋を作ったんですね。

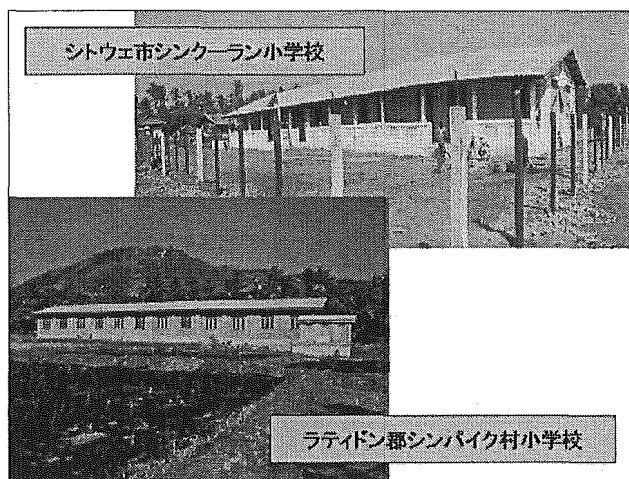
そしたら、それが非常に評判になって、あちこちの村から私のところにも架けてくださいということで、結局、最終的には 180 本以上のここで橋を架けてしまって、未だにまだ架けて、もう挙げ句の果てにはジェティって言って、簡単な港も作りました。ここまで、マウンドっていう地域に行くまで、ヤンゴンから飛行機と船といろいろ使って、あと車で大変なところを通過して、1 日かかるんですけども、橋ができて、簡単なジェティもできたので、非常に経済の活性化に役に立っているというふうに聞いております。



これは先ほどのマウンドのラカイン州というところなんですけれども、そのシトウェというのが州都なんですけど、ここは実はモスリムとイスラム教徒とピタッと住み分けができてまして、ここで私達は技術訓練学校というのをやっています、今までに 500 人ぐらいの卒業生を出していますが、なぜそこで技術訓練学校を始めたかといいますと、ミャンマーはご存知のように 88 年に民主化運動がありまして、あれ以降、大学を閉鎖してしまったんですね。つい 3 年ぐらい前まで全部大学閉鎖になっていました。そして、そのためにその以前はかなり若い人達の技術レベルは高かったと思うんですけども、その 10 年近くに及ぶ大学閉鎖のお陰で非常にやっぱり技術的な遅れっていうのは目を覆うばかりで、私達ここで技術訓練学校をやることで少しでもその若い人達のやる気とかそういうのも含めて、将来に向けてこれが必要だということで、こういうことを始めています。



それから先ほどの小学校も作ってきましたということなんですけれども、木造の小学校が非常に多いわけなんですけれども、こういう鉄筋の必ずコンクリートで、これ全部 OJT で村の人達に出てもらって一緒に作ることによって、これは我々の学校だというふうに自覚してもらおうということも非常に重要なことなんです。ここは一応コンクリートでちょっと高い所に作るので、サイクロンなどが来た時も皆がここで避難できるという、そういう役割も担っています。



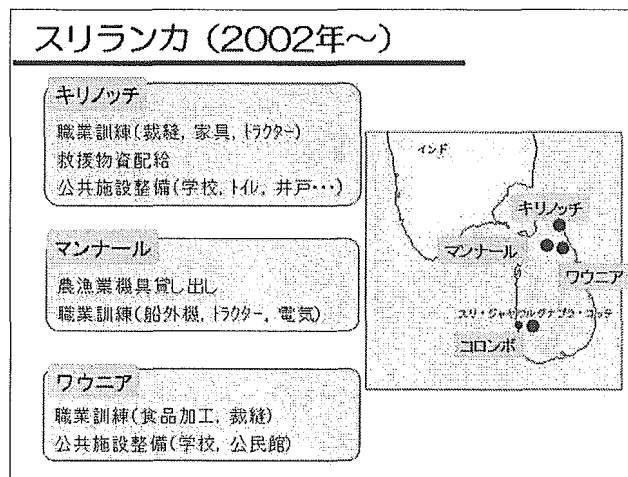
それからこれはまた話が変わって、ミャンマーの中央部分の中央乾燥地域、バガンというパゴダが 2,000 基ぐらい建っている観光地なんですけれども、これも少し村の方に入りますと、ここはラカイン山脈というのがさっきの豪雨地帯から、ちょこっとラカイン山脈を越えたところで、ここは今度は年間 600~500 ミリぐらいしか雨の降らないという乾燥地域になっています。非常に極端なんですけれども、ここはビルマ族しか住んでいないんですけれども、非常に水がなくて困っています。このように子供達が水汲みのあれにかり出されるわけなんですけれども、女の人と子供の仕事になっていまして、女の人なんか背骨が曲がったりなんかしていますね。それから、このように左上の写真みたいに溜池の水を利用して、これは実は牛もここに来て、牛も一緒に飲んでるわけです。



私達は非常に衛生状態良くないなと考えて、平均寿命が非常に短いですし、何とかしたいという、これも実はミャンマー政府の方からここで井戸を掘って欲しいということで来たんですね。ここで井戸を掘るっていうのはどういうことかっていうと、実は大変な地層的に難しい地域で、井戸を掘るっていうと皆さん、上層掘りですかとか言うんですけども、そんなものではないわけです。場合によっては300mぐらい掘らないと出て来ないわけですね。それで、このように電気探査といたしまして、専門家を投入しまして、私も技術的な難しいことはいろいろ説明できないんですけども、かなり本格的なパソコンで手解析しながらの帯水層を探り当てて掘っていくというような作業をやっておりまして、これはJICAの開発パートナーというスキームで、3年間この地域でやらしていただいて、80本の新規井戸と、それから溜池の改修、それから簡単なダムを作ったりというようなことをしております。



スリランカなんですけれども、スリランカは2001年にですね、長い間20年近く内戦があったわけなんですけれども、停戦合意がありまして、実はこのマンナールとかキリノッチとかワウニアのあたりっていうのは北部でして、これはいわゆるそれまでは反政府組織といわれていたLTTEというタミール人の人達の地域なんです。



一応このスリランカっていうのは民主主義の国家ですから、選挙をやるとシンハラ族の人達が勝つわけです。そうして、その人達がシンハラ優遇政策というのをやったことで、そのタミールの人達が反発して、20年間という長い内戦期間があったわけです。このこと自体あんまり知っている日本人も少ないんじゃないかなと思うし、実はこのスリランカに対しては日本が世界のドナー国、もちろんODAなんですけど、ドナー国だったわけですね。その停戦合意になる前までには、日本はここが非常に内戦で大変なことになってるっていうことを知らん振りして支援を続けていたわけで、それがまあシンハラの人達の軍事費に消えたっていうことは、かなり高い頻度で考えられることじゃないかなと思うんです。スリランカにもいろいろなNGOがいっぱい入っているんですが、停戦合意以前にこのLTTEの支配するキリノッチ辺りに入っていたNGOの団体というのは1つもなくて、私達が2002年に当初から入ったんですが、入った時に実は日本のNGOとして北部に入ったのは一番乗りだったんですね。その後、私達は和平がうまくいくんではないかというふうなことで、実はそのミャンマーでいろいろ、それまでミャンマー人のスタッフをいろいろ養成してきました、井戸の技術だとか橋梁建設だとか、いろいろな技術を持った人達がいたので、そういう人達をこのスリランカに投入していけば、お役に立てるんじゃないかという感じで入って行ったんですが、なかなかここも非常に今、厳しい状態です。ここでも一応その停戦後の、20年間戦争やってきましたから、若い人達はほとんどきちんと勉強を、学問を受けていないわけですね。そういう人達のために即、収入につなげるようにということで、職業訓練をやっています。それから戦争で未亡人とか、親を失った女の人達が非常に多いので、そういう人達のためにお裁縫と、それから家具作りですね、家具作りっていうのは一石二鳥で、破壊された小学校に行くと壊されたままの家具が山積みになっているんですけど、それをこの女性達が家具の修復という技術を身に付けて、彼女達の収入にもなるし、なおかつそれが学校の再建にもつながるということで、女の人達に家具作りを教えています。それから、私達BAJの得意とする分野なんですけど、トラクター整備だとか、電気だとか、溶接だとか、そういう職業訓練も行っています。あと、小学校を建設したりとか、井戸建設ですね、そんなこともやっています。



マンナールも同じようなことをやっています。あとワウニアもそうです。ワウニアはちよどシンハラとタミールの両方の人達がいるところです。



これはまあ昨年の末に起きたスリランカ津波被害状況なんですけれども、私達は緊急救援の団体ではなくて、そこに入ってじっくりと開発と一緒に共に汗を流してやっていくという、後ろにパンフレットあるので後で見たいと思いますけれども、そういう必ず一緒に考えながら共に汗を流してやりましょうということなんです。緊急救援でいっぱいいろんなNGOが入って来て、最初その以前は600団体だったNGOが今なんと6,000団体入って来ている。行政の能力が低いので、そういう人達にうまく対処できなくて、今大変な混乱状態で、それから入って来たNGOもオックスファムなんかはものすごい巨大なお金を持って入って来てますから、1日に40万円使わなきゃいけないということで、まちでミシンだの何だの、ものすごいいっぱい買って来て、それをスリランカの津波の被災者達に配り回っているんですね。そういう状況で、逆にこう何か被災者の人達がもう、学校にも行かせないでそういうものをもらおうということに専念して、配ったものが次の日には、よくある話ですけど、市場で売られているというような、そういうふうな感じになってますが、一方で非常に目立つ何ていうか、マスコミが入りやすいような場所の人達っていうのはそういう状態なんです。NGOがあるいは入りやすいようなところですね、逆に小さなモスリムの人達の村なんていうのはやっぱり相変わらず援助物資が届いていないっていうのが、これが現実です。



私達は北部なので、北部の漁村の漁港に近いムラティブというところで、漁村を破損した漁師さん達ですね、その人達にエンジン修理の技術研修みたいなことを行っています。それから、やっぱり緊急救援やらないわけにいかないんですね。村の人達が来て、BAJは一体、津波被災で何してくれるんだっていうふうに聞かれるわけです。それをやらなきゃいけないということで、これはアンパーラという南部の方ですけども、仮設住宅を今やっておりますが、以上です。



司会 岡崎 勲

はい、ありがとうございました。Bridge Asia Japan は決して橋だけじゃない。日本とアジアを架けるという意味ですね。ベトナム・ミャンマー・スリランカの 3 か国を中心にやってらっしゃる。大体人数的にはどのくらいの人数で活動されているのですか。

根本 悦子

今現在、東京には 12～13 名の常勤のスタッフがおります。そして、非常勤の人達が 2～3 名おります。そして、あと登録しているボランティアだけでも 150 名以上いまして、ボランティアさんが毎日のように何らかの形で関わって、東京事務所を支援してくれています。一方、スリランカの方は日本人スタッフ、インターナショナルスタッフといいますけども、4 人ですね。それからローカルスタッフが、スリランカって北海道のちょこっと小さいぐらいなんです。人口も 2,000 万人足らずのところなんですけれども、車で走っちゃうとどこでも、1 日走れば行けちゃうもんですから、何かあっちこちに事務所ができちゃって、ちょっと分散している状態なんです。ミャンマーのローカルスタッフは今現在 5 つの事務所でやっています、60 人ぐらいおります。それからミャンマーですけど、ミャンマーが一番規模が大きくやっております、ミャンマーはヤンゴンを含めて、他にマウンドとシトウェとバガン、実はバガンから 50km 離れたチャバドンというところに最近、事務所を移したんですけど、4 か所全部事務所がありまして、そこで建設などをやっておりますので、ローカルスタッフは 150 人ぐらいいるんじゃないかなというふうに思っています。

司会 岡崎 勲

それから、年間の予算は。

根本 悦子

年間の予算はですね、大体、1億5,000万から2億、あるいは多い時は2億5,000万ぐらい、いつてるかと思います。

司会 岡崎 勲

ありがとうございます。こうした NGO の活動、私どもがちょっと調べてみましたら、NGO の団体だけで日本で約1万は超えていますね。1万は超えているというふうなことを見ておりますが、それで武見先生や政治、先生はずっと外交問題とか医療・保健・福祉、さらに非常に外交に詳しくいらっしゃるわけですけど、こうした NGO の働きですね、日本にとってこれはアジアの、先生よくお話しのお安全保障にもつながる問題かとも思うんですが、その辺、先生のお考えを少しお話しただけたらと思うんですけども、よろしくお願ひします。

武見 敬三

非常に現場におけるご活躍に対して、この2つの NGO の方々には心から敬意を表したいと思ひます。その上で、日本でも1990年代の中頃から、こうして NGO の活動というのが活発になり始めてきて、政府としても、特に小渕内閣の時ですけども、こうした NGO に対する支援というものを大幅に改善するという動きが出てくるようになりました。その過程で改めて、政府の中でこうした NGO と連携する時の政策概念として、人間の安全保障という考え方を取り入れるようになりました。これは、人・物・金・情報が国境を超えて行き交うことによって、肯定的な面もありますけれども、さまざまに否定的な面もある。特に人の移動というようなことに伴って、進行感染症が国境を越えて拡大をしたり、あるいは組織犯罪といったようなものが拡大をしたり、こういった傾向というもの、テロリズムなんかもその1つの事例ですけども、これらにいかに関係社会が協力して対処するかという時に考えられるようになった、新たな安全保障の概念でした。ただ問題は、人道的な立場からこうした人間の安全保障という概念が組み立てられてきたものの、その政策概念というのがやはりまだ極めて曖昧であるということで、日本国政府はこれは政策概念としてこれを整理するために、緒方貞子さんと、それからもう一方はアジアで初めてノーベル経済学賞をもらったアマルティア・センさんのお2人を共同議長として、「ヒューマン・セキュリティ・コミッション」というのを設立して、そこでおおよそ2年間に渡って審議をしていただいて、2003年の5月に国連のアナン事務総長とも協力をした上で最終的な報告書を発表しました。そこで示された新たな政策概念について、これから簡単に申し上げたいと思ひますが、それは今日お2人がお話しになったことと密接に関わりがあります。

いかなれば、こうした途上国に対するさまざまな国際協力を考えた時に、改めて地域社会を単位として、そこに住む人々を対象とした政策というものを、包括的にこれを行おうと。それぞれ個別具体的に専門的な NGO がいろいろ活動をされておられるわけでありませけれども、こういった NGO とそれから国連機関、これは今話しに出てきた UNHR であるとか WFP であるとか、UNDP といったようなところが主にそういった国連の機関になるわけですが、こういったところと NGO と、そして日本国政府と、そして現地国政府、また特にローカルの地方政府、こういったところとネットワークをきちんと組んで、そして効果的にこうしたプロジェクトを組み合わせて、value added approach といってますけれども、それぞれ相互により効果を増幅させるような形の、そういった支援を地域社会の人々に対して実行しようということを考えるようになりました。

2つのキーワードがあって、まず1つは「ヒューマン・エンパワーメント」、これはその地域社会の人々というのが、先ほどの山岳民族の子供達なんかその1つの典型例ですけれども、本来人間として非常に高いポテンシャルティを持っておられる、しかしそれが生かせない。そこを支援するために学校という施設を通じて、しかもそこをただ単に、従来の日本の支援のような箱ものだけを作るという支援ではなくて、その中身のソフトにも関係する支援を複合的に行う。即ち、こういった農耕期の場合、あるいは先ほどの水汲みとかもありましたけれども、子供達が農耕期は働かされることによって学校に来なかったり、あるいは教職員さえもがアルバイトをしなければ生活できないために学校で授業をさぼっちゃう、こういったようなことを実際にさせないための一定のその地域の貧困に対する支援策というものを組み合わせて、こういった学校に対する支援策を行う。また、そこでは公衆衛生上の環境改善ということも視野に入れて、技術的な協力を実行することによって、それぞれその子供達自身が衛生環境改善する意志を持ちながら、その指導の下で確実にそういった地域の衛生環境が改善されていく、こういった複合的な観点からそれぞれの個々の人々の能力というものを支援し、その自発性を尊重しながらもそれを育てていくということが、ヒューマン・エンパワーメントとして地域社会を単位として国際社会がネットワークを組んでやろう、これが1つ。2つ目は「プロテクション」という考え方で、いかにそういう地域社会でそういう人々がいて、国際社会の NGO や国連機関がいかに協力しようとも、その地域の治安秩序や、あるいはその地域の特に地方政府の行政能力、ガバナビリティというものに非常に多くの問題がある場合が多い。そういったものをまた強化するような支援というものを国際社会が行って、それによってその地域におけるヒューマン・エンパワーメントが、より安定した形で実施できるような、そういう環境を整備しよう、こういったことをこのプロテクションという観点から国際社会が協力して行おうという、この2つのキーワードを通じてこの人間安全保障という政策概念というものを、我が国政府はこれらの有識者と協力して作成をいたしました。

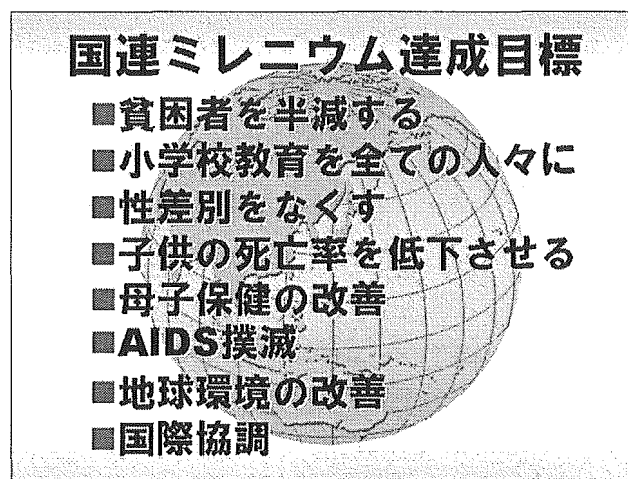
その中で、また同時にこの今日のテーマでもあります保健衛生というところにも大きな焦点を当てて、我が国としてもそこに積極的に協力をしようとする体制を、今まさに整え

ようとしているところであります。この考え方は1992年にODA大綱ができた時にはまったくありませんでしたけれども、2003年の8月に我が国は10年ぶりにこのODA大綱を改正をいたしましたけれども、新たに改正したODA大綱の中でこの考え方を基本的な考え方として、我が国はこれを導入するようになりました。問題はこれらを実行する予算を確保できるかどうか、そのための政府とNGOとの新たな協力のための支援体制を効果的に組むことができるかどうかといった点に、今まさに入ってきているわけでございます。幸いにもODAの予算自身が削減される過程で、NGOに対する予算の支援措置だけは一定程度は拡充をするという傾向にあるわけでありまして、まだまだ不十分であるということは否めませんので、今、そういう問題意識に基づいて、例えばNPOの国際協力の方々に対して、税制上の新たな便宜措置というものを充実させるということ、次年度の予算措置、及び税制改正の中で実施することを、今、私どもはほぼ確定しようとしてきているわけがあります。そういう中で、なかなかお役所というのは官僚的な手続がいつも極めて時間がかかって複雑なものですから、なかなか体制の整備には時間がかかっていることが否めない事実です。従ってぜひ、NGOの方々と立法府の我々との間のコミュニケーションというものも円滑にしながら、こういった改善方を図る努力は常に私どもとしても認識しているところでございます。以上です。

司会 岡崎 勲

ありがとうございます。大変心強いですね、おそらく今、近田さんあるいは根本さんも聞いていてですね、ぜひもうちょっとディスカッションしたいと思うことがあると思うんですが、ちょっとその先生の今のお話の中で私も非常に感銘を受けたのは、やっぱりネットワーク、双方向にとにかくメリットがなきゃいかんと、ヒューマン・エンパワーメントの問題であるとか、あるいはネットワークを作って貧困に対する問題もというふうないろいろとお話をいただいて、人間の安全保障という面から非常に重要なんだとお話いただきました。

私のスライドを出していただけますか。国連の保健医療の面からのミレニアム宣言です。貧困者を半減する、小学校教育をすべての人々に、8つのゴールというのが出されてきているわけです。



黒川先生は非常に学問の世界、先生は学術会議会長でいらっしゃる、確か2~3日前の日経新聞にも大きく取り上げられていたのは、学術会議の改革をなさっている、その3つ目の柱に国際交流を入れてらっしゃったと思うんですけど、1つお話しただけであればありがたいです。

黒川 清

どうもありがとうございます。今年はアインシュタインが有名な論文を出して100年目です。けどその時、彼は物質の本体は何かとか、光は何かということを一生涯考えていたわけですよ。それで、例えば相対性理論の $E=mc^2$ なんていうことは、研究費があるからやったわけじゃありません。一生涯考えているからです。けどそれから100年経って、ものすごく世の中変わったでしょ。1938年、それからもちろんキュリー夫人とかいろんな科学が進んでくるっていうのは、なぜかということを一生涯考えているわけですが、33年後に $E=mc^2$ というのは物質が爆発すると猛烈なエネルギーが出るっていうことが分かるわけですが、それはいろんな科学が進歩してくると、ウラニウムはそれは可能性があるとか、いろんなことがあってですね、1938年に実際に核を爆発させるとすごいエネルギーが出るんだということが実験的に示されました。けどその7年後に原子爆弾が2つ落っこったんですよ。なぜだと思いませんか？ 科学の進歩と、それをどう使うかは人間の問題なんです。それは、戦争がずっとあったからです、20世紀全般の最大のプロジェクトがマンハッタン・プロジェクトだったわけですよ。今までの戦争投資の全額よりも大きいような投資額です。つまり今の日本の電力の30~40%は原子力発電ですけど、100年前にアインシュタインそんなこと考えたと思いませんか？ これは人の英知の問題です。100年前は世界中で、ジェンナーのことが200年前にあったので、それは皆がバタバタ死ぬからです。で、一生涯それを何とかしようと考えている人達がいるわけですよ。これは研究室じゃありません。パッションですよ。100年前には、もうその頃はパスツール研とかコッホ研があったりしたもんだから、結核菌は見つかってました。結核菌が病因の本体だということは知ってました。けど100年前は毎日死んでる人の7人に1人は結核で死んでました、世界中。原因は分かっても薬屋がありません。その頃ですね、感染症が一番の問題ですけども、その感染症に効くような薬は何にもありませんでした。ジェンナーの200年前の天然痘の種痘ということがあったわけで、それ以外にはありません。ですけども、初めて感染症に効く薬がたまたま見つかったのは、1908年、秦佐八郎とエリックがサルバルサンという梅毒の薬を見つけた、という話があったのがまだ100年も経っていないんですよ。

私達の常識はどこにあるのかということを考えるのはすごく大事なことです。2000年前のローマ帝国が一番その頃豊かだったんですけど、その頃の平均寿命は25歳です。なぜだか分かります？ ほとんどの人は5歳までに死んじゃうんですよ。栄養状態が悪かって、それは一番いい国でもその程度ですから、100年経って、2000年かかって、いろんな人が知

恵を絞り出しながら、100年前には日本やヨーロッパやアメリカの平均寿命が40~45歳ぐらいになりました。15~20年の平均寿命を稼ぐのに2000年かかっているんですよ。この100年で日本やアメリカの平均寿命は80歳になりました。40年稼ぐのにたった100年ですよ。これが皆、常識だと思っているところに、自分達の価値観の何が一体背景にあったのかということを理解する必要が大事です。日本の5人に1人が65歳以上になっちゃいました、という世の中があって、たった100年でこんなに変わるのに、今の常識とこれから100年先にどんなことが起こるか考えたことありますか。100年前には地球上の人口がようやく16億になりました。2000年前の人口は正確には分かんないけど、大体1億か2億です、せいぜい。1億ですよ、2000年前、ローマ帝国の頃、今の日本より少ないんだから。それが16億になるのに、倍になるのに1000年かかっています。1000年前です。それが今、16億になって、この100年で64億になりまして、4倍。皆が住む場所が必要になって、食糧が必要で、エネルギーが必要で、水が必要で、そういう世の中になって、どんな世界を皆、期待したいんですか。この64億の人達が毎日食うのに大変ですよ。皆さん、日本では比較的豊かかもしれないけど、世界中の人がまあ日本の普通の人達の生活をしようと思ったら、地球の資源があと4つの地球が必要だということは分かっているんです。そんなことをやっていきたいわけ？ その64億のうちの80%は途上国と、アフリカのような非常に貧乏な人がいて、20%の人が貧困です。1日1ドル以下です。そういう人達のこと考えたことありますか。

その64億のうちの60%は広いアジアにいます。このアジアはおそらく経済成長をこれから当分の間はしていくだろうと思えますけども、そのアジアでちょうど100年前は日露戦争が終わった時期です。日本は奇跡的に勝ちましたけど、西洋の文明を取り入れて近代国家として独立できたのは、西洋のヨーロッパ文明が世界中を席卷していましたけど、その間に独立を維持できたのは日本とタイだけです。なぜだって考えたことありますか？ そうすると、20世紀前半のあの戦争は、やっぱり植民地の解放とかいろんな話があったんだけど、それだけの格差が出てきて、例えば私がUCLAにいた時に、エイズの患者さん、1981年、最初の患者さん何人か診ました、そのカリニ肺炎の。何でこの人達がカリニ肺炎なの？ 移植を受けているわけでもないのに。大分診ましたけど、だけどたった24年後に、今までにエイズで死んだ人、もう2,000万人死んでいるんですよ。今、世界中にエイズ、HIVポジティブの人が4,000万いることは、皆さん知ってますね、情報時代の社会だから。じゃあ何かアクション取ってますか、考えてますか、ということが大事だということです。1年に大体、単なる下痢で死んでる子供が200万以上いるんですよ。なぜ？ きれいな水がないからです。まともな水がない。こんな水がある必要ないんですよ。考えたことありますか？ アジアの中でも20%の人が貧困です。1日1ドル以下。この水が、これは「Vittel」ってどこでできてるのかな、フランスでしょ、フランスからこんな水がたくさん運ばれてきて、これがすごいビジネスになっている、水商売っていうんだけどね。この水の同じ量のガソリンが、クルードオイルが70ドル超えたところで、こっちの方がまだ高いんですよ。